実中研 ARCHIVES

Ⅰ．実験動物の近代化運動と実中研の創立

伊藤 豊志雄・日置 恭司・横山 峯介

戦後間もない 1950 年代はじめに、日本の実験動物の品質向上をめざした「実験動物の近代化運動」が起こりました。運動の中心となったのは、安東洪次先生（東京大学伝染病研究所教授・第５細菌研究部長）と田嶋嘉雄先生（国立予防衛生研究所獣疫部長）でした。二人は関連分野で要職を務める研究者に声をかけ、1951 年 10 月に実験動物研究会を設立しました。発足時の会員数は約 30 名でした。その後この研究会が日本実験動物研究会を経て、会員数 1,000 名を越す日本実験動物学会へと発展したことを考えると、こじんまりとした会からのスタートでした。

設立趣意書には取り組む課題として、⑴ 伝染病、免疫学、細菌学の研究に、また細菌製剤その他の検定に必要な自然感染のない動物や、各種の感染や毒に対して、感受性の一定した動物の供給、⑵ 腫瘍研究に必要な特殊な系統の動物の供給、⑶ 四季を通じて一定した飼料の供給、⑷ 各種動物の飼育管理法の改善、の４項目が掲げられています。そして翌年から年６回の会誌（実験動物彙報）を発行し、積極的な活動を開始しています。

しかし、研究会が設立されたからといって、すぐに近代化が進んだ訳ではありませんでした。1975 年の田嶋先生の論文によれば、「実験動物の近代化運動は 1950 年前後から英・米ならびに日本ではじまった。初期の 10 年は“良い動物、適切な飼育”についての啓蒙活動であった。1960 年ごろから基礎的な研究がはじまり、そして実験動物科学(Laboratory Animal Science)という用語が使われはじめた。」とあります。すなわち設立当初の研究会の役割は、集会開催や会誌発行によって研究および知識の交換を行い、学問、技術ならびに関連事業の振興に寄与することでした。課題を掲げても、それを解決する直接的な手立てを打ち出すことは難しかったのです。

一方、1945 年 9 月に慶應義塾大学医学部を卒業した野村達次先生は、すぐに東京大学伝染病研究所に入所しましたが、体を壊して２年間ほど休養した後、復帰して安東研究室の一員としてチフス感染の研究を行っていました。そのようなある日、安東先生から「いま君がやっている実験を掘り下げて、何かの発見に達することも、それなりに意義のあることだ。しかし、他方、君がいま使っている実験動物のレベルを、もう一段ひき上げることができれば、それを使う日本の医学の研究水準が、確実に一段上がる。君は、その、どちらを選ぶかー」と、問いかけられま

実中研創立当時の安東洪次先生、田嶋嘉雄先生、野村達次先生（左から）

した。自身でも実験動物の質の悪さを痛感していた野村先生は、この安東先生の問いかけを契機に、自ら実験動物の近代化を実践する覚悟を決めて、私的機関である実験動物中央研究所（実中研）を創立しました。1952 年 5 月、弱冠 30 歳のときでした。
安東先生と田嶋先生は、実中研の創立にあたっても、その後（も所の役員を努めながら）の事業運営にも生涯にわたって尽力されました。自身ではじめられた“日本の実験動物の近代化の実務”を、自らも実中研の一員として野村先生と一緒に成し遂げるという、強い使命感を持ち続けていたからではないでしょうか。研究会設立時に掲げた課題は、実中研と関連機関などが一体となって弛まぬ努力を続けた結果、1970 年代はじめにはおおよその目標が達成されました。

実中研は、来年 2022 年 5 月に創立 70 周年を迎えました。これまで幾多の危機や困難をのり越えて現在があるのは、安東先生と田嶋先生、そして野村先生の実験動物科学にかけた崇高な理念と情熱を、しっかりと受け継いできたからだと考えています。

参考資料：
① 野村達次・飯沼和正：六匹のマウスから. 1991. 講談社
② 田嶋嘉雄：医学研究における実験動物の基本的な考え方. 順天堂医学. 21: 339-344. 1975.
③ 田嶋嘉雄：―実験動物学者の歩んだ道―.実験動物の過去と現在―. 実験動物. 33: 1-23. 1984.